

第1回ぶんぱくあり方検討会 議事要旨 2024年8月16日(金) 14時~17時

1 開会

傍聴者9名

2 市長あいさつ(趣旨説明)

博物館学や文化政策、博物館運営など博物館活動をされている広い知見を持った方々にぶんぱくあり方検討会の委員を引き受けていただき、感謝している。多くの傍聴者にも感謝する。

公共文化施設は市民が主体となった市民参画なしには考えられない。議員、市民の皆様も関心を持って、共にあり方を考えていただけたらと思っている。今後、市民の皆様と共に考えるためのワークショップなど、市民参画の機会を持ちたいと考えている。

文化博物館は平成3年に開館以来、30年あまり市民に親しまれてきた。30年経過し、施設の老朽化、展示内容等を始め、様々な課題が出てきている。本日から始まるぶんぱくあり方検討会では、今後この博物館がどうあるべきか、コンセプトや方向性から時間をかけてじっくり議論いただきたい。今日は現状と課題など、情報を共有させていただく。

市長として、市民が明石に愛着と誇りを持つためには地域の多様な文化的営みを共有して分かち合える文化的コモンズの形成が重要と考えている。その拠点として、文化的なつながりや地域の記憶と共感の装置となる公共文化施設の果たす役割というのは大変大きい。明石市ではこれまでSDGs未来安心都市明石の実現に向けて、誰一人取り残さないやさしい共生のまちづくりを進めてきた。今年度のまちづくりの基本方針を「対話と共創」とし、多様な市民の生の声を幅広くお聞きし、市民と情報共有しながら対話を通して地域の課題を明らかにし、産官学民共創でさらにやさしい明石のまちづくりを進めている。委員の皆様方には、文化を広義に幅広く解釈して、まちづくりや教育、福祉、環境などの幅広い観点から、対話や共創の手法を活用して、博物館のあり方を検討いただきたい。

最近ある小学生の取り組みを見て感銘を受けたので話題提供する。今年2月にニホンオオカミの剥製が発見されたと論文で発表された。これは当時小学校4年生だった小森さんが国立科学博物館の収蔵庫にあったヤマイヌの一種とされていた剥製がニホンオオカミじゃないのか?と疑問に思ったところから始まった。論文執筆に協力したのが国立科学博物館や山階鳥類研究所の方であり、子どもの探求心、一つの疑問から一緒になって研究に仕立てていったことは、博物館のこれからの役割である。小学校教諭の河合先生や大阪市立自然史博物館の佐久間先生が委員に入ってください

ており、次世代を育て、次世代につなぐ博物館、子どもたちの想像力や探究心を巻き起こす博物館はどんな博物館か、私自身も問いを立てながら考えている。ぜひ、それぞれの活動の経験なども含めて、これからのぶんぱくのあり方について、既存の考えにとらわれることなく、まずは明石の博物館がどうあるべきか、未来志向、新しい発想で忌憚のないご意見を交わしていただけますよう、心からお願いを申し上げます。

3 委員及び事務局紹介

(委員自己紹介)

(事務局・関係機関紹介)

4 会長の選出

会長に藤野委員を選出した。

藤野会長より、職務代理者として五月女委員が指名された。

5 議事

(1) ぶんぱくあり方検討会の目的・予定(資料2)(要旨)

(事務局より説明)

1 ぶんぱくあり方検討会の目的

ぶんぱくが今後どうあるべきか、コンセプトや方向性について検討を行う。

2 今年度のぶんぱくあり方検討会の開催予定

第2回を11月頃、第3回を2月頃に開催予定

当初、2025年8月までに5回程度の開催を予定していたが、議論の進行状況によって、回数等が変更になる場合がある。

3 ワークショップの開催予定

第2回あり方検討会の実施前に、市民を対象にしたワークショップを開催予定
他施設の視察を検討

(委員からの意見なし)

(2) ぶんぱくの現状と課題について(資料3)(要旨)

(事務局より説明)

1 設置の目的 記載のとおり。文化博物館条例で定めている。

2 運営方法の推移

ぶんぱくは平成3年に開館、当初市直営で運営。その後、平成19年に指定管理者の運営に移行。移行当初は、博物館業務のすべてを指定管理者が担当。市の歴史や民俗に関する調査は長期の年月を要することが多い。指定管理業者が変更になった場合、それらの業務の継続性を保つことが困難なため、平成28年度からの第4期指定管理期間より業務分割方式として、博物館資料の収集や調査研究、企画展の実施などは、市の学芸員が担当することとし、役割分担をしている。

3 現在の運営

現在は、小学館集英社プロダクション・鹿島建物共同事業体が毎年「明石市立文化博物館事業計画」を策定し、管理・運営を行っている。今年度の運営方針は、『ひともまちも元気な「文化の息づくまちあかし」づくりを底支えする、ぶんぱく！へ』。

指定管理者が行っている業務、3ページに指定管理者と市職員の人員配置、4ページにぶんぱくの来館者数等の利用状況や収支状況を記載している。

4 課題

指定管理者従業員や市の学芸担当者を中心に意見聴取したものを記載している。主なものを紹介。

(1) ぶんぱくのコンセプト、役割、機能等

○コンセプト、ビジョン等の不存在

・館の設置条例はあるが、具体的なコンセプトやビジョンがないため、館の目指すべき姿について共通認識ができていない。

○ぶんぱくの役割が不明確

・特別展を実施する意義や展示内容について、その考え方の共通認識ができていない。
・企画展の内容は、現在、配置されている学芸員の専門分野（歴史・民俗・美術）に限られているが、どのような分野まで広げるべきか明らかでない。

○常設展示室の課題について

・リニューアル計画を立案できていない。
・常設展示室の役割・目的が定まっていない。
・展示物が固定されている。また、展示物の入れ替えを行える範囲が少ない。
・体験型の展示がない。
・室内が暗く、展示の文字も読みにくい。

(2) 施設の有効活用について

○館内スペースの有効活用

- ・景色のよいテラスがあるが、活用できていない。
- ・ロビーに布団太鼓等を設置しているため、他の目的でロビーを使用することが難しい。
- ・南側にも来館者用入口があるが、現在は閉鎖しており、スペースの活用ができていない。

(文化博物館武井館長)

来館者を対象としたアンケート調査の結果について報告

文化博物館では昨年 11 月から来館者アンケートを実施している。これまでも特別展や企画展ごと、展示ごとのアンケートは実施していたが、昨年 11 月から全ての来館者に向けたアンケートを実施している。性別、年代、住まい、来館者数、来館目的のほか満足度、館内の今後充実させてほしい機能を聞き、7 月 12 日時点で 155 名からの回答を得たので報告する。

問 8 「文化博物館があなたにとってよりよい博物館となるためにどの機能を充実させればよいでしょうか」では、博物館の機能、美術館の機能、ギャラリー機能を充実してほしいという意見のほかにカフェやワークショップスペース、交流スペース、学習支援施設なども充実してほしいという意見があった。これから検討会で館のコンセプトや、役割・機能を検討される中で参考になるかと思う。

(委員からの質問なし)

6 意見交換 (要旨)

(1) 明石市での文化政策の取組 (藤野委員)

- ・自治体が担っている公共政策は何か。そして、公共政策と文化政策の関係を説明する。
- ・政策策定の場面では、「市民とともに作る」というガバナンスが重視されており、同じことを文化の分野でも行うことになる。
- ・文化の分野で公共の福祉を増進させることが文化政策の課題であり、「人づくり」と「まちづくり」、「共生社会づくり」を文化政策で実現させることが、公共の福祉の増進につながる。グローバル化によって生ずる課題や、少子高齢化によって生ずる課題をどうやって文化芸術の力で解決するか。むずかしいが、解決のヒントは文化芸術のなかにたくさんある。
- ・社会包摂によって共生社会を目指していくのが文化政策の最近のトレンドである。
- ・「明石文化芸術振興基本計画」では、コーディネート機能を重視している。コーディネート機能を通じ

て、市民、地域、アーティスト、文化芸術団体、文化施設、学校の教育現場、行政などがネットワークを作り、それぞれが有機的に連携して、文化芸術活動、情報の収集、発信、交流等を活発に展開することを想定している。「明石文化芸術振興基本計画」では、その役割を明石文化国際創生財団が担っている。

・「明石文化芸術振興基本計画」では進捗管理と文化施設間の実施事業のすり合わせをしていたが、その役割が計画から失われてしまった。

・ **文化的コモンズ**の考え方を明石市にフィードバックして文化博物館を中心に、明石市の文化振興を広がりのある、開かれたものにしていきたい。

・ 文化拠点（今回の事例では文化博物館）を核に、地域の様々な組織、アクターや活動とつながっていくのが文化的コモンズの考え方

・ 公立文化施設は文化的なつながりを求めて人々が集まり、地域の記憶と共感の装置として機能する文化拠点を目指すべきであり、文化博物館をどのように外に開いていけるのかを検討するのは、あり方検討会の一つのミッションである。

（2）いま、博物館は－最新博物館事情－（五月女委員）

・ 博物館というのは、意外と幅広い。美術館、水族館や動物園も「博物館」である。博物館法に、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、とあり、幅広いものが博物館の対象になっている。

・ 博物館は展示を観る場所だけではない。文化財保護、調査研究も大切で、これらをおろそかにする博物館は博物館ではない。

・ 市民による歴史や自然の学びの拠点でもあり、明石市の SDGs 戦略計画の中の柱3「子どもの育ちをまちのみんなで支える」に直結する。ユニバーサル・ミュージアムの実現は、SDGs 戦略計画の中の柱2「笑顔あふれる共生社会（インクルーシブ社会）をつくる」につながる。また、市民活動の拠点、ボランティアやサークルでの活動は、柱5「まちの魅力を高め、活力と交流を生み出す」につながる。（SDGs との関連がある）

・ ICOM（国際博物館会議）の博物館の定義には、「包摂的」とか、「多様性」、「持続可能性」とか、「有形及び無形の遺産」、「非営利の常設機関」という言葉が使われている。

・ 博物館は社会教育法に則る社会教育施設だが、2023年4月の博物館法改正後、文化芸術基本法の本質にも基づくこととなった。その影響で国の文化審議会のメンバーも博物館関係者以外の人も加わるようになった。

・ 博物館法の改正により、博物館事業に「電磁的記録の作成・公開」、いろんな組織・団体との「相互連

携」、「地域における教育」が追加された。また、外へのアピール・発信が重要であり、外部に向けた「観光」「企業連携」「国際交流」「まちづくり」「DX(オープン化)」「福祉・健康」「社会的包摂」「地域課題解決」「社会課題解決」が考え方として追加された。

- ・「文化観光」の視点も加わり、文化観光活動の推進を図ることが求められている。
- ・博物館が「人的、物的、財政的な基盤をしっかりと確保」し、「使命に基づく方針と目標を定めて活動」することは大前提である。そのうえで、これなくして博物館とは言えないというくらい重要なものが「調査研究に裏付けられた活動」である。
- ・博物館は、いろんな活動を通じて、新たな価値を創造する、新たな価値と一緒に市民と共に創造していく拠点であり、専門的力はいつまでも向上するように努めていかなければならない。
- ・いろんな人たちが関わって、いろんな形や大きさのたくさんの人たちに、博物館の中、あるいは外で関わってもらうことによって化学反応が起きるのが地域に根差した博物館の形である（吹田市立博物館の例）。
- ・地域の人たちの博物館活動への参加の例として、飛騨みやがわ考古民俗館での石棒クラブがある。いろんな発信をしていく、いろんな発信を博物館目線だけでなく、いろんな人たちを巻き込んでやるのが重要である。

（3）博物館に求められること-大阪市立自然史博物館での経験から-（佐久間委員）

- ・市長から国立科学博物館の収蔵庫でのニホンオオカミ標本の事例の紹介があったので、
(https://www.kahaku.go.jp/research/publication/zoology/download/50_1/L_BMNS_50-1_33.pdf)
明石市でも同じようなことがあったことを紹介する。明石では、アケボノゾウの全身骨格を中学生が発掘しています。最初に発掘したものを研究者や大阪市立自然史博物館などに持ち込んで、全身骨格の復元につながった。どちらも、学術が市民と直接の接点を持っていて、相談に行ける研究者が身近にいるから実現したこと。

(<https://omnh.repo.nii.ac.jp/records/170>)

- ・博物館は100個あったら、100個要求されることが違う。成り立ち、学芸員、コレクション、みんな違うので同じことはできない。
- ・博物館が「どうあるべきか」は博物館によって違う。
- ・博物館が「どうありたいか」を誰が、どう考えるかがすごく大事。博物館で働いている人、学芸員、指定管理者、行政、博物館を使う人、関わる人…法律に書いてあることだけで決まるのではない。
- ・博物館の使命を言語化しておくことがすごく大事。言語化して市民と合意していれば、事情が変わった

時に「権力者だけで変えることはできない。これは社会契約です」と言える。

- ・市民と専門家と設置者（行政）の三者がうまく対話して、共通の拠り所として、この博物館がどうあるべきなのかというミッションみたいなものを持っていないとうまくいかない。市民の思いと、それを学芸員と設置者との間でバランスをとっていくことがすごく大事。

- ・博物館は100年先までを考えて、明石の歴史の中で、明石の自然の移り変わりの中で積み重ねられてきたものを現在に生かして未来に残していくところなので、使命が簡単に変わっては困る。そのために、いろんな形で話し合いをして、方向性を重ねておくことがすごく大事。

- ・ステークホルダーは誰か？ステークホルダーは博物館に影響を与えることができる人。その人たちとのつながりをどうやって持っておくか。真剣に共に博物館を支えてくれる人たちがあちこちに必要。

- ・ステークホルダーの声をどのように集めるか？ステークホルダーが誰もいない、誰も関心を持ってない、あるいはステークホルダー同士が対話していない状態は危険。

- ・行政や首長が博物館に関心を持っておらず、存続の危機に陥っている博物館がある。

- ・将来を考えている職員がいない、考えていても長くいられない、年次雇用で切られてしまうのも、現場ステークホルダーがいない状態。

- ・博物館をどう変えていくのか、将来計画を中の人で作れない博物館は難しい。

- ・博物館と一緒に支えていく利用者集団、外部の専門家グループや関連分野のアマチュアや地域の住民が博物館に関心を持っているかもすごく重要。

- ・博物館の活動目標は入館者数とか収益ではなく、人づくり仲間づくり。

- ・博物館にあるモノには、本質的な価値がある。本質的価値を積み重ねていくためには、それを体系立てて研究する人がすごく大事。本質的価値を見出す専門家をしっかりさせると、バランスが取れる。3方向の綱引きを、市民（利用者）・専門家（学芸員）・設置者（行政）が引っ張るとちゃんと真ん中で安定する。

- ・既に使命やミッションを持っている博物館も見直しをする。「うちの博物館は何をやるための博物館なの？」というミッションが学芸員の中、あるいは事務スタッフの中で共通理解になる。

- ・博物館登録に使命が必要と言われているのだから、作りましょう。身の丈に合った、実現性がある使命やミッションを作ってください。

- ・博物館に関係する社会課題は多いが、全てに対応できない。何をどう選ぶかは博物館の使命との関係で変わる。何を優先する場所なのかをはっきりさせておかないと持たない。みんなが何をやる組織なのかをボランティアの人たちにもわかるようにシンプルにしておく必要がある。

- ・ひとつの博物館でできることは限られているから連携するのはよいが、博物館側のメリットを考えて、

次につながるような形を考えないと続かない。

- ・文化博物館の周りにどのような潜在的なパートナーがいるのか？一緒に何ができるのか？どう実現するのか？を考えておかないといけない。では、誰が考えるのか？学芸員なのか？将来を見据えて、5年後10年後のことを考えられる人は誰なのか。

- ・10年20年後の博物館がどうあるべきかを考える中核的なスタッフをどう形成するかが文化博物館の課題。中核的なスタッフだけでなく、利用者を含めて妄想や野望がないと何も始まらない。

- ・文化博物館に必要なのは、学芸員（専門家）、行政もだが、博物館の周りにいる「つなぎ手」（中間支援団体）。何かと博物館をつなぎ、支える人たち。誰もがそういう博物館を支える一員になるかもしれない。

（4）シビックプライドと文化施設（吉成委員）

- ・図書館を核に、4つの施設がある複合施設「ぎふメディアコスモス」で、図書館がどうやって全体をつないでいくかをやってきた。今では図書館がサードプライスとして、来館者がそれぞれの形でくつろいでいるところまで深まってきている。

- ・はじめは理念がなく、図書館としての機能を満たせばいいという状態だったが、「子どもの声は未来の声」という図書館の理念を作ってから、事業活動の方向性が明確になった。

- ・子どもたちの育ちを末永く見守る場所として図書館があるということを一番大切にしている。

- ・「お互い様」の気持ちを持ち寄る小さなコミュニティをどう生み出していけるかを大事にしている図書館を作ろうというところから始めた。

- ・いろんな形で一緒にやっていく意義や面白さを、職員と市民の皆さんと共有しながらやると広がっていく。

- ・博物館がどう開いていくのかが今回も求められる。

- ・人が見えないと歴史は面白くならない。情報は誰が出すのか。学芸員が集めてくる情報もあるし、市が持っている情報もある。市が持っている情報をそのまま提供してもおもしろくないので、それをどういうふうにしていったらいいかとなったときに、主体的な、自主的な担い手を作っていくことを、そのあとどういう風に活動するかは別にして、やったほうがいい。

- ・図書館が一つのきっかけになって、ハブになって、いろんなところと、いろんな人たちと一緒にになりながら、関わることで広がっていくことが始まっている。一緒にやりながら共通のビジョンであったり、共通の利益だったり、何を大事にするかという価値観であったり、というものがだんだんと出てきており、こだま化していくことが非常に大事。

(5) 意見交換（要旨・抜粋）

（委員A）

・ぶんぱくの運営は指定管理制度を導入しているが、業務分割で学芸部門は市が入り込んでいるという複雑な形態。これまでの運営経緯を聞いて、今度もこれでいいのかという問題がある。

・ぎふメディアコスモスや昨年秋に茨木市にできた「おにクル」を見ると、ぶんぱくより後からできた施設だけどうらやましいなと思う。

・明石では今ある様々な文化施設が、活動とか人とかをコーディネートするつながり方をして、新しい展開にしていけるのか、あるいは各施設レベルで何か新しいものを考えるのかという大きな問題がある。

・「ぶんぱく」という愛称で呼ばれているのはすごくいい。市民に広く定着しているのは捨てがたい。

・「文化博物館」という名称の博物館はここ京都文化博物館のみだと思う。しかし、何がミッションなのかよくわからない。名称の「文化」は何を指すのか。設置目的には、「歴史、民俗等に対する市民の理解を深めるとともに、市民の文化の向上及び振興に資するため、本市に文化博物館を設置する」とある。「歴史、民俗等に対する」とまず出てきて、特出しで「歴史、民俗」がある。その後に特に「市民の文化の向上」がある。この「文化」という概念の中に「歴史、民俗」は入っていないのか？とすると、この「文化」はアートのことか？美術のことか？博物館は文化人類上の広い意味での文化を扱っているので、その前に「文化」がついていると形容矛盾じゃないかとなる。そうでないとしたら、なぜ博物館の前に「文化」を付けたのかというところ、「文化」はどうも広い意味の「文化」ではないのではないのか。

・どのような経緯、議論を得て、「ぶんぱく」が1991年に作られたか、そのプロセスを私たちは何も知らない。「ぶんぱく」ができた経緯の中でどんな議論があったのかというところまで遡って見る必要がある。

・同時に、文化概念を明確化していく必要もあると思う。

（委員B）

・どのような経緯、議論を経てぶんぱくができたかのプロセスを見ることに賛成。

・博物館の使命を考える時に今までを更地にして考えるのは博物館的にはありえない。今ある資料、今ある活動、今あるユーザーというベースの上で未来を考えなくてはいけないので、ここまでどう

いうふうになってきたんだらう？という経緯を丹念に辿って、じゃあどういふ未来を、と考えることが必要になったと思う。

- ・ぶんぱくの周りにどういうユーザーがいるのか？
- ・天文科学館という、周辺のユーザーとしっかりした密接な関係を持って博物館活動を展開している成功事例があるので、参考にしながらいろいろやっていくと面白いと思う。

(委員C)

- ・キーワードがいくつかある。文化博物館はハコモノとしてここに来れば展覧会を見られるということだけでなく、もっとコーディネート機能があればいいと思う。文化博物館が核になっていろんなところにつながっていくコーディネート機能というのがひとつ目のキーワード。
- ・2つ目に次世代の育成。次世代が大人になった時に、また新しい文化が次々と生まれてくる。明石がそういう循環を生み出すまちになったらいいと思う。
- ・天文科学館が「時のまち」というキーワード、図書館が「本のまち」。文化博物館のキーワードは？「文化のまち」はあまりにも広域すぎてわかりにくい。文化博物館の本質を再認識して、確立していかないといけないと思う。
- ・兵庫県立美術館名誉館長蓑豊さんは小学4年生を美術館鑑賞のターゲットにしており、以前館長をしていた金沢 21 世紀美術館では小学4年生を無料招待している。それは4年生で今までなんとなく対象物を見ていた目が見える目になるから。何か興味を持つ目を持つのが4年生、10歳ぐらい。そこで培ったものが今度は、見つめるように変わっていく。そうなると問題意識を持ち、自分の課題を持って物を見るようになる。見る目があって、見える目があって、見つめる目。スタートはやっぱり見る目で、そこに文化博物館がならないといけない。
- ・子どもたちが文化博物館に行くことを、展覧会に行くことではなく、文化博物館に足を運ぶことが楽しみになる機能があれば、次世代への影響が変わってくる。
- ・市内のギャラリーと文化博物館がつながっていくと、まち全体が美術館になったり、歴史を深める機会になったり、ということがどんどん生まれると思う。ぶんぱくがハブ機能を担って活用できたらいい。
- ・天文科学館、図書館と文化博物館が一つの連合体として、明石の文化を掘り起こせるような、確立していけるようなシステムがほしい。ぶんぱくだけをどうにかするのではなく、天文科学館や図書館と一緒に連合体としてやっていけるような機能が持てたらいいと思う。

(委員D)

・企業で赤ちゃん用のオムツを作っている。製品開発には、赤ちゃんだけではなくて、お父さん、お母さんをはじめ、市民や自治体の人と関わることが多い。ぶんぱくの設置目的の「歴史、民俗等に対する市民の理解を深める」について、赤ちゃんのオムツにも歴史がある。一つの製品に対して文化や歴史があるので、例えば企業と連携して、文化博物館と一時的にでも関わるのであれば、市民としては、文化を今まで使っている製品や身の回りのものに対して循環しようという意識改革のきっかけになるのではないかな。

・博物館にはそれぞれ専門分野があるので、文化博物館で聞けないことがあるのが弱点であるなら、一時的にその部分に企業を受け入れることで、市民が文化をもっと知りたいと思えるような機会を作ることができる。

(委員E)

・兵庫県立考古博物館の展示を作る時に、企画段階評価、オーディエンスリサーチをした（利用者が何を知っていて、何を知らなくて、何を誤解しているか、だからどういうアプローチの展示が必要かを考える基礎になる調査）。兵庫県立考古博物館の明石原人の展示をどうするかの話になったときに調査をしたら、35歳以上の人は明石原人を知っているが、35歳未満の人は知らなかった。それは、当時その年齢を境に明石原人について副読本に載らなくなったからなのがあった。こういうことは聞かないとわからない。現状理解をしないままではみんなが知っていることと捉えて展示を作ると失敗に繋がる。

・ワークショップを一般市民の潜在的な希望や開館後の利用想定参考になるポイントを引き出す機会にできれば、とても良い。

・博物館に関係する人たちがフラットな立場でどんなものを希望するかを語りやすい場作りをしたうえで意見を集める。

・最終的には、集まった意見を参考に展示開発チームが展示を作り、運営や活動は市民の当事者意識を引き出しながら一緒になって複合的に考えていけたらいい。

(委員F)

・共通の体験、経験がある身近なものから入っていくのは展示として面白い。「展示の自分化」としてオムツの展示は可能性がある。

・ミッション、使命をしっかりと作っていく必要がある。

・ミッションを考える過程自体があり方を考えることにつながっていくと思うので、ミッションを

作ることを一つの目標とするのはありかもしれない。

- ・市の歴史・文化に関する業務の継続性を保つために業務分割方式を導入した。市の担当職員は正規職員になるのか。継続性が大事と言っている割には、市職員の配置が不十分。

- ・場合によっては、指定管理期間の検討も必要。
- ・博物館の基本機能を押さえることが大事。自分たちの足元をしっかりと固めていく、そのプロセスをしっかりと踏んでいくことを考えてないと、ふらついてしまう。優先順位を考えることが必要。

(委員G)

- ・設備は別として、展示の中身はおもしろかった。海底の深さと、獲れる魚の種類の分布図は、明石でおいしい魚が獲れる理由として、衝撃的だった。展示室の入口にあればと思う。

- ・明石原人の展示も、発掘された骨が焼失したことを初めて知った衝撃があった。
- ・どう見せるのかと、どういう方向を深めていくということにつなげていくのかを考えると、素材は悪くない。

(委員B)

- ・見る人の興味を惹く展示をするために、どうやって資料収集を、調査研究をする機能をどれだけ持てるかが、やりたい展示が実現できるかどうかの鍵。

- ・市民参加型調査や市民と一緒に調査研究をして展示を作ることができれば一番いいが、そのためにはそれをバックアップする研究者がいないとできない。市民参加型調査は市民だけではできないのが現実で、その機能をこの博物館でどうパワーアップされるかがすごく大事。

- ・展示室の映像資料そのものが歴史資料みたいになっている。例えば、いかなごは絶滅危惧種で、映像のいかなご漁そのものも民俗的に絶滅の危機になっている。だから今調査しなければ、となったときに、誰が調査をするのかという話になる。

- ・企業と連携した展示や、地域と連携したコーディネート機能などは全てアウトプット。アウトプットするためのプロセスをどう作っていくかが博物館として大事になる。

(委員A)

- ・明石の文化資源は豊かで多様で、明石には工業地帯もある。文化と産業界とのつながりは掘り起こせるのではないか（ドイツ・ルール工業地帯の例）。

- ・明石に住む外国にルーツがある人たちの文化を知りたいし、その人たちに明石の文化を伝えるこ

とも重要。

- ・既存の展示やこれまでの特別展示にとらわれない側面に、もう少し光を当てていけるといい。

(委員F)

・外国の人たちにどう関わってもらうか、その地域に根ざしていくことになるのであれば、外国の人たちの文化も地域の一つの文化的側面として、表現していく必要があるのか、ないのか、というのも重要な要素。(ウェールズ国立博物館の例)

・委員はそれぞれ博物館関係につながりを持っている人がいるので、展示をどうするかは展示業者や博物館関係者に今の展示を見てもらってアイデアを出してもらってワークショップを開いたり、必要な関係者につなぐこともできる。

(委員B)

・博物館の主体となる人たちが確立したら、そういう外の関係者を交えて進めるのもよいが、主体が確立していない段階で外部がいろいろ言っても現場がアップアップになる。

(委員D)

・現状把握ができていない。私たちが、博物館がどういう状態にあるのかをどのくらいわかっているのかがわからない。

・現状を把握したうえで、理想と現実のギャップを埋める作業が必要。

・理想的な状態に対する成功基準がない。成功基準がないと、何年か経ったときにできたか、できていないかの判断ができない。その状態が怖い。

・現状把握、理想の状態、ギャップを埋める作業。ギャップを埋める作業を評価する基準が必要。評価基準はインプットとアウトプットで測るシステムが必要。

(委員A)

・評価は重要で、評価と基準は作らなければいけない。単なるアウトプットやアウトカム指標を作るだけではよくない。

・ぶんぱくがどういう状況なのか、来館者から見てどうなのか、それから、ここで働いている人たちからはどうなのか？

・ファクトを集めていかないと、ベクトルが定まらない。

7 第2回に向けて

(委員F)

・現場がどういう仕事を具体的にやっていて、どういう専門性の方々がどういう配置をされているかについての私たちの認識が不十分なので、最低でも、市と指定管理者でどういう専門の職員が配置され、どういう研究をしていて、年間どのくらい展示をしているのかを教えてください。

(委員B)

・資料3の4の4ページから課題として現場の皆さんに書いていただいたものがある。こういう声が一番大事と思うので、まとめる前の書き起こしがほしい。

・今後のワークショップの予定で、関係者のワークショップもあるが、一緒に入りたい。

(委員G)

・博物館にこない人からどうやって意見を聞くか。

(委員B)

・傍聴者のみなさんもたくさん想いがおありだと思うのでインタビューしてみたい。

・キーパーソンになるような外部の人へのインタビューもあったらいい。

(委員E)

・博物館関係の委員会に参加することが多いが、いつももう少し条件が整備されている。何年先にどうしたいか、市として博物館をこういう方向でとか、建築物の耐用年数が聞かせてもらえる。ぶんぱくが、今後も館としてちゃんと存在をめざしているかは聞きたい。

・常勤の学芸員を増員採用する可能性や覚悟があるのか。

(委員B)

・理想論でなく、現実論を語ろうとしているから、現実的なことを知りたい。

(委員C)

・ステークホルダーは誰になるのか。明石市民？しかし、来館者は明石市外が市民の倍以上。

・明石市民のぶんぱくの認識度や文化に対する期待度が実際どうなのかを、もうちょっときちんと整理して、明石市民のぶんぱくを目指すのか、それとも、より多くの来館者に来てもらえる施設を目指すのか、をはっきりさせたい。

・理想論なのか、現実論なのか。例えば、建物をこんな風に変えましょうとか、展示フロアをこれだけ増やしましょうみたいなお金や年月がかかることや、専門の学芸員さんのこれからの増員が見込まれるのか、というようなことを語っていいのか。

・天文科学館は専門性の高い利用者もいれば、子どもたち向けのいろんな企画や明石の独自のプログラムをいっぱい出している。そういうところの考え方とかを聞かせてもらうワークショップもあればいい。

(委員D)

・今までやってきたものがどんな感じなのか、これからの制限としてはこれぐらいのものがあるから、その中で考えたいのかという、条件を知りたい。

・他の優良事例をベンチマークとして設定するなら、ベンチマーク先がどういう展示、どういう条件でやっていて、どのくらい成功しているのか、それとも成功しなかった原因とか、そういうものが分かっているのであれば、最初にそういうことを知っておくことが重要。

・ベンチマーキング先の確認と、私たちは未来としてアイデアの状態として持っていくための条件と、今までやってきた過去のデータという3つを教えてください。

(委員F)

・博物館に明確な方向性がないということが、我々が共有できることだろう。

・傍聴者が多いことに感動した。何度かこういう委員会に出席しているがこんなに多いことはない。

・市長、副市長が最後まで同席している。委員が言いたいことを言っても、みなさんがしっかり聞いて議論になっているところに、これから明るいと感じた。

(市長)

本日は、ぶんぱくだったらこんなリソースがあって、こんなことができるということを制限をつけず自由に語っていただいた。コンセプトや方向性をこれから新しくしていく中で、最初から、できないというところから語るのは、幅を狭めてしまう。広い議論の中から、明石ならではの博物館はどのようなあり方がふさわしいのかを、委員の先生方の知見で教えてくださいたいと思い、最後ま

で参加させていただいた。

人の配置や展示内容は、素晴らしいものにすれば、それだけ予算もかかる。人は本当に重要。だからこそ、今回の指定管理期間は3年として、この3年の間にしっかりとあり方を議論して、その先にどういう形で文化博物館を運営していくのかも含めて未来思考で考えていきたい。委員の先生方にはぜひ、イノベティブな発想でお願いしたい。予算は、市民にとってどれぐらい博物館が必要なのかという観点で判断するものだと思っている。委員の先生方は、明石のこの場所で、市民のシビックプライドが育ち、誇りと愛着が持てるような理想の文化施設であるにはどうしたらいいかという観点からお話いただけると大変ありがたい。第2回も許す限り参加したいと思っている。

先ほど言っていた、設置の当初に立ち返ることはすごく大事だと思った。ぶんぱくの設置時に、どういう議論がされて設置目的が決められたか等をもう一度振り返り、変えていかなければならないものがあるのであれば、変えていけばいい。また、大事にしていくべきマインドは、しっかり伝えていかなければならないと思う。